

---

ATONEMENT- 【episode?】 two people to snuggle up to

油桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シークレットゲーム? - SIN AND ATONEMENT  
- episode? - two people to snuggle up to

### 【Nコード】

N3359P

### 【作者名】

油桜

### 【あらすじ】

長く続いてきた【ゲーム】は終わった。総一達が参加させられた【ゲーム】を最後に。【ゲーム】を運営してきた組織は崩壊し、悲劇の連鎖は断ち切られた。あれから10年の時が過ぎた。

不穏な空気が流れる。終わったはずの【ゲーム】の気配が、人々を悲劇の連鎖へと突き落としていく。【生死を賭けたゲーム】が今再び始まる。

## プロローグ 〈寄り添う二人〉（前書き）

### 注意事項

この作品はシークレットゲームの二時創作です。舞台は原作のシークレットゲーム episode?の10年後です。当然の事ながら、ゲームの参加者は基本オリジナルキャラです。また、原作キャラが出てくる場合、及び死亡する場合があります。解除条件が原作とほとんど違います。更に、舞台設定も相まってご都合主義が入る可能性が非常に高いです。これらの事が許容できるという方だけ、先にお進みください。

## プロローグ く寄り添う二人く

あなたは私の孤独を癒してくれた

一人で生きてきた私の心を癒してくれた

あなたは私の無力を咎めることをしなかった

自分の無力さに打ち拉がれていた私を支えてくれた

あなたのためなら私は自分の命を棄てることすら厭わないだろう

あなたのために私の人生全てを捧げよう

あなたのために私は立ちふさがるもの全てと戦おう

時間は流れていく

もはやあなたの命が残り僅かだとしても私はあなたの傍にしよう

あなたがその目を閉じる瞬間まで私はあなたの傍で見守っていよう

あなたを一人にはさせたりはしない

あなたが私のもとを去ると言うならば私はあなたを追いかけよう

私は最後まであなたと一緒にしよう

二人で寄り添っていよう

いつまでも

プロローグ く寄り添う二人く (後書き)

プロローグというか、ただの詩的なものです。

果たしてこれをプロローグと言っていいものやら……。

次の話からが本番です。

第1話：ゲーム開始（前書き）

【BET】

ただいま準備中です。しばらくお待ちください。

微修正しました。

## 第1話：ゲーム開始

そこには何もなかった。

そこに存在するのは自分一人。

誰か……いないのか？

声にならない声を出す。

それに答える者は誰もいない。

そこに唯一存在した者は孤独だった……。



「……………いい加減見飽きたな。この夢も」

そう呟き、目を開き周りを見渡す。

「どこだ……………ここは？」

目にした光景は見慣れないものだった。

薄汚れた天井。ボロボロのベッド。埃をかぶっている床。その他、質素な家具がいくつか置かれていた。廃墟になったホテルか病院の一室のように見えた。

とりあえず立ち上がろうとする。

「……っ!!」

すると突然、立ち眩みに襲われた。倒れそうになるのを壁に手をつけて防ぐ。体に力が入らない。

「……睡眠薬でも嗅がされたのか？」

見慣れない場所。何者かによって眠らされ、この場所に運び込まれたのだろう。そう考えた。

「となると、誘拐されたわけか？その割にはまったく体が拘束されてないわけだが。……まあ、首に何かついているようだが」

首に何かあるな、ということには既に気付いていた。あまり気にも止めていなかったが。それによって動きを制限されていたわけではなかったからだ。

自分の首に触れてみる。どうやら金属製の首輪がつけられているようだ。

「拘束するための物ではないのか？それとも直接動きを制限する必要はないということか？」

何の意味もなく首輪がつけられているわけがない。そう考えていた。

そうしてもう一度周りを見渡す。そして部屋の隅の方に自分のバッグがあることに気付いた。

何か盗られていないかバッグの中身を見てみる。

「特に盗られた物は無いか……。携帯もあるな」

携帯の画面を開く。予想していたがやはり圏外だった。圏外だからこそそのままにしてあるのだろう。

その後、携帯のカメラで自分の首輪を撮った。

首輪はシンプルな物であった。そして何か接続できるコネクタと思われる物があった。

とりあえずもう一度バッグの方を見る。

「…ん？」

よく見るとバッグの陰に何か機械のような物があった。

「これは……PDAか」

画面にタッチすると画面に何かが表示される。

「クラブの【Q】？」

画面にはトランプのクラブの【Q】が映されていた。まったく訳がわからなかった。だがそのままでは埒が明かないのでもう一度画面をタッチする。

すると今度は【ルール】、【機能】、【解除条件】といった項目が現れた。とりあえず【ルール】の項目をタッチした。

【ルール1】

《参加者には特別製の首輪が付けられている。それぞれのPDAに書かれた条件を満たした状態で首輪のコネクタにPDAを読み込ませれば外す事ができる。条件を満たさない状況でPDAを読み込ませると首輪が作動し15秒間警告を発した後、建物の警備システムと連携して着用者を殺す。一度作動した首輪を止める方法は存在しない。》

【ルール2】

《参加者には1〜9のルールが4つずつ教えられる。与えられる情報はルール1と2と、残りの3〜9から2つずつ。およそ5、6人でルールを持ち寄れば全てのルールが判明する。》

【ルール3】

《PDAは全部で13台存在する。13台にはそれぞれ異なる解除条件が書き込まれており、ゲーム開始時に参加者に1台ずつ配られている。この時のPDAに書かれているものがルール1で言う条件にあたる。他人のカードを奪っても良いが、そのカードに書かれた条件で首輪を外す事は不可能で、読み込ませると首輪が作動し着用者は死ぬ。あくまで初期に配布されたもので実行されなければならぬ。》

【ルール6】

《開始から3日間と1時間が過ぎた時点で生存している人間を全て勝利者とし20億円の賞金を山分けする。》

「……なるほど」

ルールに書かれているのは無茶苦茶な事だった。だがルールに首輪の事が書かれていた。

「つまりこの首輪は、ルールに書かれている首輪の事だろうな」

このルールが事実だとすれば、この首輪一つで拘束するには事足りる。縛り付けて動けなくする必要はない。むしろルールが本当ならば動けなくしてしまつては困るのだ。首輪を外すも何もあつたものではないのだ。

ルールによるとPDAは全部で13台あるらしい。つまり自分と同じ境遇に置かれている人が他に12人いるということだ。となるとPDAはA～Kまでの13台があるのだろう。

更に3日間と1時間生き延びた人には賞金を与えると書かれている。何故誘拐した人間に賞金なんざ出すのか不明だが。

「……とりあえず別の項目を見よう」

次に【解除条件】の項目を見た。

【Q】

《【A】のPDAの所有者が半径5メートル以内に24時間以上いること。ただし自分で持っていても条件は満たされない。》

「……つまり【A】のPDAの所有者を探せつて事か」

どうやら条件を満たすには【A】のPDAの所有者を探さなきゃい

けないみたいだ。しかし……

「【Q】のPDAとの相性は良くないだろうな……」

条件を満たさねば死ぬというのならおそらく全てのPDAが全て同時に条件を満たすということは不可能であろう。ましてや【Q】の条件は【A】が必要であるとはつきり書かれている。ここに相性の悪い条件を合わせるのが妥当だろう。おまけに自分で持っていても条件は満たせないときている。もし自分で持っていても条件が満たせるならば相手からPDAを奪ってしまう方がいい。しかし自分で持っていては条件が満たせないというならば、ただPDAを奪えばいい、ということにはならない。

「……まあ、この書かれているルールが真実ならば、だが」

このルールが全て真実であるという保証はない。嘘である可能性だって十分にある。

「もつともこのルールが真実であるということを前提にして動かなければならないがな」

ルールが本当ならば何もしなければいずれ死んでしまう。嘘であるならばそれでいいが、物事はいつも最悪の事を考えて動かなければ、取り返しのつかないことになる。

「さて、まずは情報収集か……」

まだルールには穴が開いている。知らない内にルール違反をしてしまつてはたまつたものではない。まずは全てのルールを把握しなければならぬ。

「……ふう。めんどくさい事になつたな」

そうして荷物を持って部屋を出た。

「………広いな」

廊下に出て周りを見渡すと異常としか思えないほど廊下が長かつた。しかも遠くの方で枝分かれしているように見えた。そして扉の数も半端なかつた。まあこれだけ広ければそれだけ多くの部屋があつてもおかしくはないが。

「地図は無いのか？」

PDAを取り出し調べてみる。すると機能のところに地図といふの



があつたのでそれを押して地図を見た。

「……………」

それは確かに地図だった。だが肝心な現在地が載っていない。自分で現在地を調べなければならぬ。

「……………めんどくせえ」

そつばやきながら廊下を歩き始めた。ちなみに地図によるとこの建物は6階建てのようだ。どれだけ広いんだと心の中で思いながら歩いてきたがすぐに立ち止まる。

「……………」

今近くの部屋から物音がしたような気がする。

耳を澄まして何か聞こえないか調べる。ほんのわずかな音だがやはり何か聞こえる。その音がする部屋へと向かっていった。

その部屋は自分がいた部屋から近かった。自分のいた部屋からほん

の数十メートルのところにあつた部屋だつた。音源はこの部屋の中  
のようだ。警戒をしつつ扉を開けて中へ入る。

……そこには銀色の長髪の女性がいた。

いや、少女と言つたほうが正しいかもしれない。自分とそれほど年  
は違わないだろう。

その女性はこちらを見て怯えていた。当然であろう。突然知らない  
男が部屋に入つてきたのだから。更に言えばこの女性も気がついた  
らここにいたのだろうし。必ずしもそれが証拠とは言い切れないが  
この女性も自分と同じ首輪をしていた。

さて、どうしたものかと悩んでいると、女性が声を震わせながら話  
し掛けてきた。

「あ、あなたが、私をここに連れてきたのですか？」

「違つ」

即座に否定した。

「たぶん同じ境遇だろうな。気がついたらここにいた」

「わ、私も、気がついたら、ここにいました」

まだ声は震えている。そりゃ、口では何とでも言えるからな。そう簡単には信じてくれないだろう。

「名は？」

「え？」

「名前を聞いているんだ」

「あ、私は……」

女性は名前を言おうとするが、それを止めた。

「悪い。名を聞くならず自分から名乗らなくちゃな」

そして自分の名を言う。

「俺の名は

」

## 第1話：ゲーム開始（後書き）

とりあえず、主人公の名前がまったく出てこないのは仕様です。最後の場面に持つていくために、わざと名前を出しませんでした。：名前もわからん奴の独り言を聞いても感情移入も何もあつたものではないかも知れませんが。まあまだ最初だし（笑）勘弁してください。

ところでtwo people to snuggle up to  
o の意味はプロローグで書いてあつた寄り添う二人という意味です。

僕は英語が非常に苦手なのでどういふ英語を当てたらいいかわからなくて、友人に相談しました。

そしてこのエピソードのタイトルが決まりました。

ただその友人も英語はそんなにできるわけではないから自信はないと言っていました。

そこで寄り添う二人という言葉を英語にするのもっと相応しいものがあれば、感想に書いてもらいたいです。

こんなことをお願いする作者も変かもしれませんが、どうかよろしく  
お願いします。

ついでに、SIN AND ATONEMENTの意味は罪と償い  
です。

こちらにも何かありましたら、よろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3359p/>

---

シークレットゲーム? -SIN AND ATONEMENT- 【episode?】 two people to sn

2010年12月7日20時54分発行